翳りの棲み処

00 「希望をもたらす建築」とは

設計主旨

がん患者と周囲の人々の悩みに応える相談センターとして、人とモノにあふれ、強い光とノイズを放つ都市のような空間ではなく、静寂と陰影によってつくられる親密な空間こそが、がん患者の心に寄り添えるのではないか。

現在、日本ではおよそ４人に１人ががんで亡くなっている。
がんを宣告されたことによる、絶望、孤独、不安、、、
「常に病気のことが頭から離れない」、「死に対する不安」、
「相談できる人がいない」、「長期化する治療への苦痛」。
突如として現れた「死」という可能性に直面した人に対して、
希望をもたらすために建築はどうあるべきか。

がんに向き合い、自分自身とゆっくり対話する時間を、安らぎを、
そして新たな状況を生きていく希望を与えたい。
いつもお互いを身近に感じながらも程よい距離感を保ち、静かで、心が落ち着く、
そんな優しさを持つ建築こそ「陰翳が生きる空間」があるのではないだろうか。

「陰影礼賛」のように、現在は忘れつつある「翳り」の空間に
日本人は花鳥風月を結び付けていた。
影は、文字や形状などの様々な情報が感知されにくくなる反面、
分からない部分を補おうとするために人が想像する領域を増やす。
そんな時、人は少し優しくなれる。

今一度、翳りの中に身を潜め、自分自身と向き合うための建築を提案する。

01 計画敷地

京都　洛西

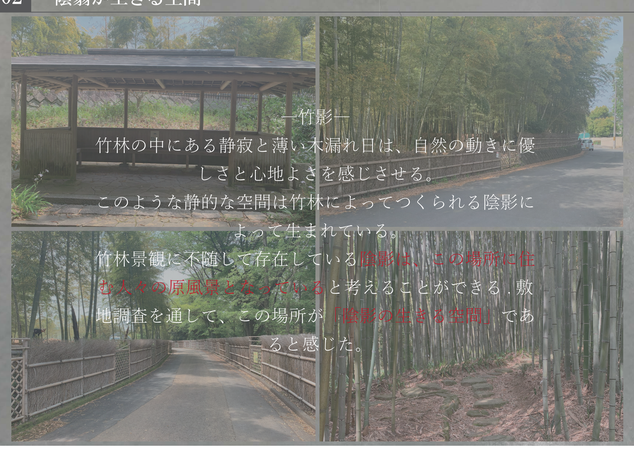
古くから竹の名産地として知られる大江・大原野地区。住宅地から見える竹の丘陵が、この場所に住む人々の原風景の一つとなっている。
現在でも至る所に竹林景観を残しているが、ニュータウンの建設によって多くの竹が伐採され、竹林の景観を保存するために環境整備を行い、「竹の径」と「竹林公園」を整備。
人は少なく、嵐山のような観光地という趣はなく、近隣住民の散歩道、通学路、タケノコ農家の仕事場所として、地域住民の憩いの場となっている。

洛西竹林公園

計画地：京都市洛西竹林公園内にある、子どもの広場

竹の径の途中にある開けた公園。周囲は竹林に囲まれ、その向こうに山々の風景が広がる。傾斜地になっている。

02 陰翳が生きる空間



―竹影―
竹林の中にある静寂と薄い木漏れ日は、自然の動きに優しさと心地よさを感じさせる。
このような静的な空間は竹林によってつくられる陰影によって生まれている。
竹林景観に不随して存在している陰影は、この場所に住む人々の原風景となっていると考えることができる。敷地調査を通して、この場所が「陰翳が生きる空間」であると感じた。

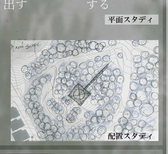
03 設計の軌跡

Phase 01

「陰翳によって安らぎを与える場所」をテーマにする。谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」を分析し、心地よい陰翳の生きる空間を如何にして形にするかを思考した。

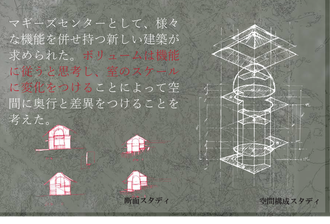
Phase 02

陰翳の生きる空間をつくりだすために、建物配置と平面形を考えた。層状の正方形平面によって空間に陰翳をつくり、中心の室を円にすることで、開明の空間が分節され、室が生まれた。



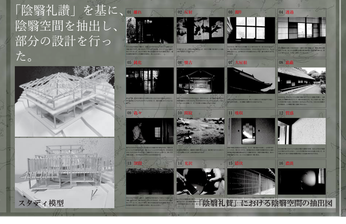
Phase 03

マギーズセンターとして、様々な機能を併せ持つ新しい建築が求められた。ボリュームは機能に従うと思考し、室のスケールに変化をつけることによって空間に奥行と差異をつけることを考えた。



Phase 04

「陰翳礼讃」を基に、陰翳空間を抽出し、部分の設計を行った。



04 配置とランドスケープ計画

風景（自然）の中に建築を隠す

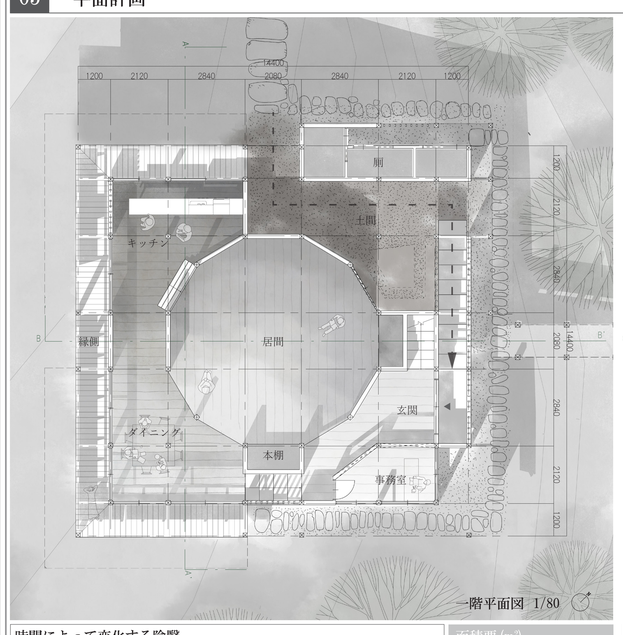
この場所の質―竹林とそれによってつくられる陰翳空間であると考えると、そこに立つ建築はそれら自然環境より目立つことはなく、建築自体も環境の中の陰影のように、ささやかな存在であるのが良いと感じた。敷地中央に建築を配置し、そこにある傾斜を利用することで建築を陸林景観の中に隠すことができる。

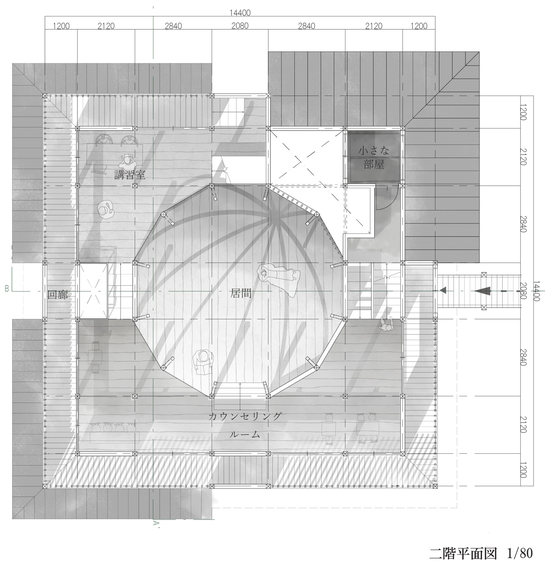
二つのアプローチ

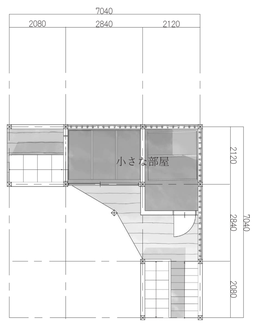
アプローチ１
〈住宅地〉⇔〈建築〉
下方からカーブを描きながら建築と庭園に接続する道。下からやってくる人に対して建築を隠すために、等高線に沿ってカーブを描く道をつくる。庭園内の竹林が建築と来訪者の視線を遮る。

アプローチ２
〈竹の径〉⇔〈建築〉
緩やかな勾配によってつくられる陰影の変化を感じるための道。接続される「竹の径」の道空間の延長として、竹林の中を一直線の道が通る。竹林と斜面によって建築は隠され、建築の存在を感じることなく建築内部に侵入する。

05 平面計画

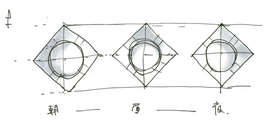






時間によって変化する陰翳

層状に空間がレイヤーに分かれ、中心行くにつれて影が深まる。東西南北に分節された室は、時間によって変動する太陽の高度と角度によって陰翳の質を変えていく。

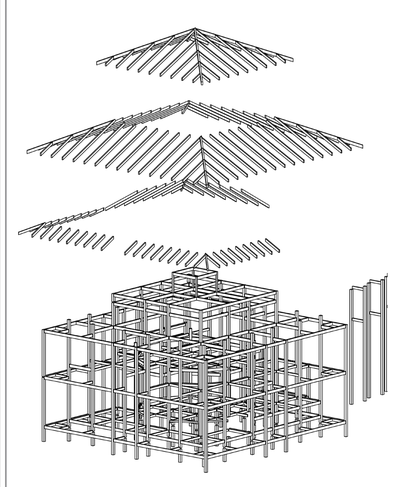


面積票 (m²)	
一階	160(土間無し)
二階	175
三階	32(土間無し)
合計	367

中心のある空間

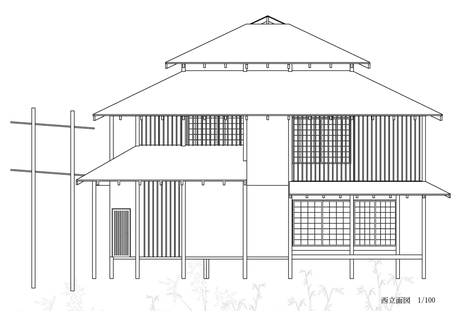
円を中心に置くことによって、中心性のある平面形ができる。中心の室では、建築の全体が見える。
中心の室は３６０度の周辺環境と陰影の影響を受けて、空間がつくられる。周辺の室は中心の円によって、周辺の室内でできる陰影を媒介して接続される。周辺の室に機能を配置することによって、中心の円には機能の無い(＝居間)、空っぽのシンボル性のある空間ができる。
「床の間のある座敷は、普段はあまり使わない。日常の生活は、その周辺で行われているわけだが、住まいの「中心」としてそこにあることが大切な空間なのである。」(阿部勤)
建築の中心は、心のよりどころとなる。

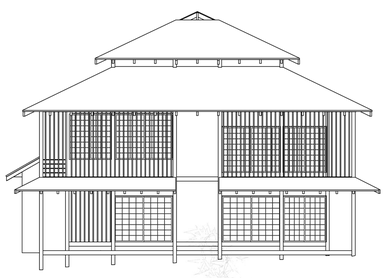
06 構造計画

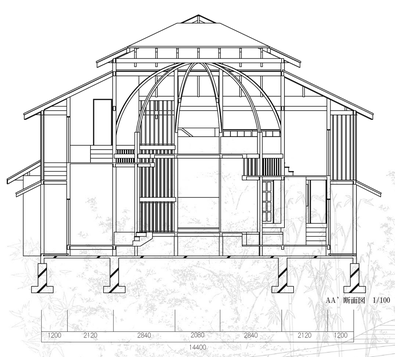


木造軸組みの中に、半球ドームのヴォールトが入れ子になっている。
空間生まれたそれぞれの性質に沿って屋根の形をスタディしていくと三層に分かれた屋根ができる。層状に重なりレイヤー化された屋根は室内に陰翳の濃淡を生み出す。中心の室に対して屋根が分かれることで、ドーム室の中心性・象徴性を高め、外部とのつながりを高めている。

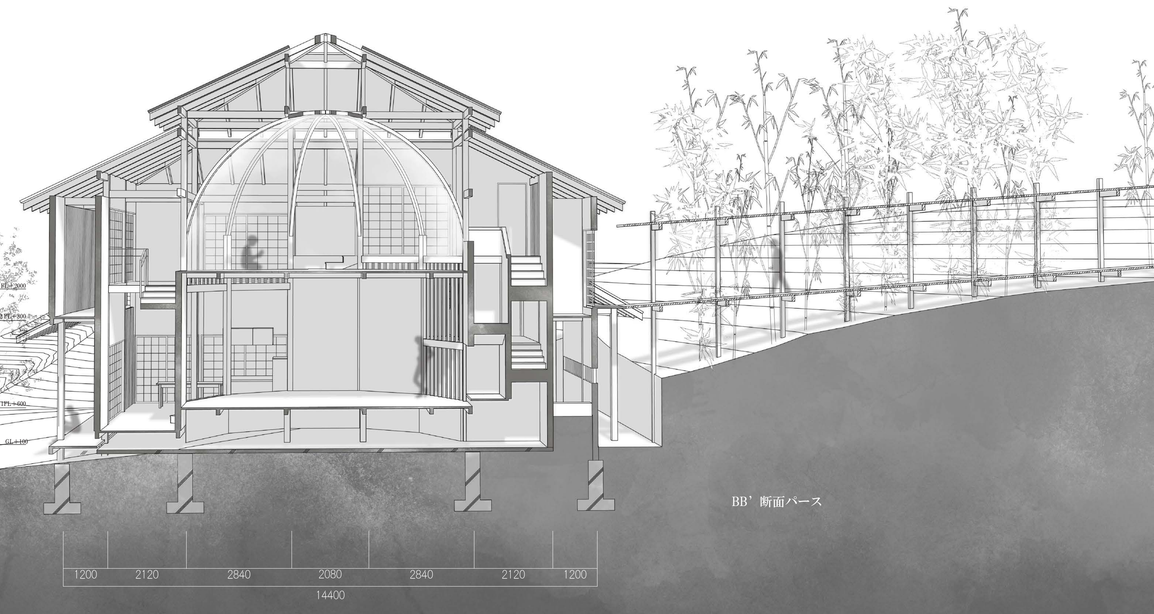
07 ヴォリューム計画


西立面図 1/100


南立面図 1/100



AA’断面図 1/100



BB’断面パース

08 部分計画

［陰影礼賛］に描かれている陰翳がつくりだす空間の質を分析し、部分の空間と素材を計画する。

01 離れ

それらは必ず母屋から離れて、青葉の匂や苔の匂のして来るような植え込みの蔭に設けてあり、廊下を伝わって行くのであるが、そのうすぐらい光線の中にうずくまって、ほんのり明るい障子の反射を受けながら瞑想に耽り、または窓外の庭のけしきを眺める気持は、何とも云えない。

02 反射

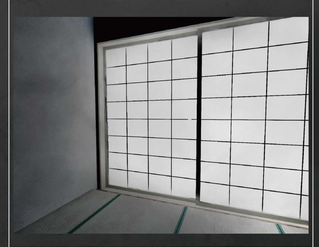
その照り返しは、夕暮れの地平線のように、あたりの闇へ実に弱々しい金色の明りを投げているのである

03 濁り

われわれは一概に光るものが嫌いと云う訳ではないが、浅く冴えたものよりも、沈んだ翳かげりのあるものを好む。それは天然の石であろうと、人工の器物であろうと、必ず時代のつやを連想させるような、濁りを帯びた光りなのである。

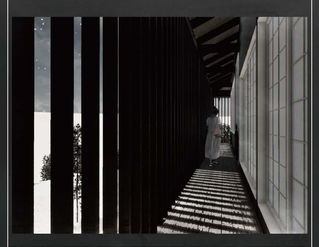
04 透過

むしろ側面から射して来る外光を一旦障子の紙で濾過して、適当に弱める働きをしている。まことにあの障子の裏に照り映えている逆光線の明りは、何と云う寒々とした、わびしい色をしていることか。



05 鈍化

そう云う時、私はその夢のような明るさをいぶかりながら眼をしばだたく。何か眼の前にもやもやとかげろうものがあって、視力を鈍らせているように感ずる。

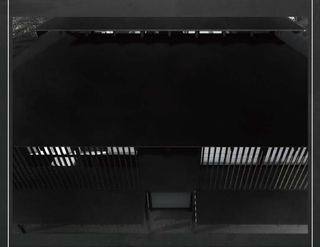


06 懐古

私は一とたびそのことに考え及ぶと、昔の日本人が、殊に戦国や桃山時代の豪華な服装をした武士などが、今日のわれわれに比べてどんなに美しく見えたであろうかと想像して、たゞその思いに恍惚となるのである。

07 悠久

左様にわれわれが住居を営むには、何よりも屋根と云う傘を拡げて大地に一廓の日かげを落し、その薄暗い陰翳の中に家造りをする。



08 遮蔽

われわれは、それでなくても太陽の光線の這入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり縁側を附けたりして一層日光を遠のける。そして室内へは、庭からの反射が障子を透してほの明るく忍び込むようにする。
われわれの座敷の美の要素は、この間接の純い光線に外ならない。

09 我々

案ずるにわれわれ東洋人は己れの置かれた境遇の中に満足を求め、現状に甘んじようとする風があるので、暗いと云うことに不平を感ぜず、それは仕方のないものとあきらめてしまい、光線が乏しいならそしいなりに、却ってその闇に沈潜し、その中に自おのずからなる美を発見する。

10 閑寂

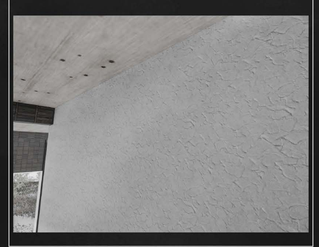
成る程度の薄暗さと、徹底的に清潔であることと、蚊の呻うなりさえ耳につくような静かさとが、必須の条件なのである

11 吸収

唐紙や和紙の肌理きめを見ると、そこに一種の温かみを感じ、心が落ち着くようになる。同じ白いのでも、西洋紙の白さと奉書や白唐紙の白さとは違う。西洋紙の肌は光線を撥ね返すような趣があるが、奉書や唐紙の肌は、柔かい初雪の面のように、ふっくらと光線を中へ吸い取る。

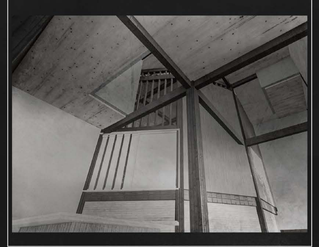
12 質感

それは色の違いと云うよりもほんの僅かな濃淡の差異、見る人の気分の相違と云う程のものでしかない。しかもその壁の色のほのかな違いに依って、また幾らかずつ各々の部屋の陰翳が異なった色調を帯びるのである。



13 深間

畳二畳ばかりの明るい世界を限っているその衝立の後方には、天井から落ちかかりそうな、高い、濃い、ただ一と色の闇が垂れていて、覚束ない蝋燭の灯がその厚みを穿つことが出来ずに、黒い壁に行き当ったように撥ね返されているのであった。



14 象徴

われらの祖先の天才は、虚無の空間を任意に遮蔽して自おのずから生ずる陰翳の世界に、いかなる壁画や装飾にも優る幽玄味を持たせたのである。

15 隠伏

つまりわれわれの祖先は、女と云うものを蒔絵まきえや螺鈿らでんの器と同じく、闇とは切っても切れないものとして、出来るだけ全体を蔭へ沈めてしまうようにし、長い袂や長い裳裾で手足を隈の中に包み、或る一箇所、首だけを際立たせるようにしたのである。

16 濃淡

しかしそれらの軸や花もそれ自体が装飾の役をしているよりも、陰翳に深みを添える方が主になっている。